

<教育長だより 71号 枇差岳朝日に映えて 令和7年12月2日>



心の応援歌

教育長 津野庄一郎

歌い継がれる校歌。その一曲には多くの思いや願いが込められています。

今朝の全校集会で、関川小学校の校歌を作曲した前田彪先生（元関小学校長：鮎谷出身）がお見えになられ、子どもたちに作曲に込めた願いを話されました。「一つは楽しく歌ってほしい。もう一つは、手拍子はみんなの心が一つになるように。」とのことです。子どもたちの元気な歌声に前田先生も笑顔がほころびました。なんでも校歌を完成させてから今まで一度も子どもたちの歌声を聞いたことがなかったと言います。校長室では「胸につかえていたものがとれました。」と大変喜んでおられました。また、「君が代」などの嚴かな歌とは違い、明るく躍動感が伝わるようにいつまでも歌い継いでほしいと期待を込めました。87歳。そのまっすぐなお姿に頭を垂れました。

校歌を歌うことに一体どんな意味があるのでしょうか。一つは子どもや教職員も、その学校の一員であるという思いをかみしめることができます。体育館一杯に響き渡る歌声は、一つの共同体としてつながります。また、校歌には学校の歴史と伝統文化、地域への誇りが息づいており、それを次の世代に受け継いでいくことができます。さらに、校歌は今の子どもたちや多くの卒業生たちの心のよりどころでもあります。何十年たっても母校の校歌だけは歌える人も多いのではないでしょうか。嬉しい時、悲しい時、辛い時にふと母校の校歌を思い出すことで、自分はこの学校で育ったという安心感が生まれ、未来を生きる力になります。校歌は心の応援歌と言えましょう。

かつて勤めた新潟の中学校で、新しく赴任した先生方に早く校歌を覚えてほしいと、教務室で毎朝、練習したことを思い出しています。

<【写真】12月2日 校歌を指導する前田元関小学校長>